

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 3 日現在

機関番号：12601

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2011～2012

課題番号：23820007

研究課題名（和文）清末士大夫官僚の対内・対外認識の新研究——郭嵩トウの「風俗」観念

研究課題名（英文）A New Study on Scholar-Officials' Views of China and the West: Focusing on Guo Songtao's Political Thought

研究代表者

小野 泰教（ONO YASUNORI）

東京大学・人文社会系研究科・助教

研究者番号：50610953

研究成果の概要（和文）：

本研究課題は、郭嵩燾の政治思想に注目し、清末士大夫の対内・対外認識の特徴を考察したものである。郭は有名な清末士大夫で、初代駐英公使に任命されたことでも知られる。その郭は政治における「風俗」の重要性に着目し、風俗の改良には士大夫同士の良い関係こそが重要であると考えた。郭はこのような観点から、同時代の士大夫のまとまりの無さを批判するとともに、イギリスの政治制度、特に議会制とアソシエーションに関心を持つようになっていったのである。

研究成果の概要（英文）：

This study aims to examine the character of scholar-officials' views of China and the West through analysis of Guo Songtao's political thought. Guo Songtao is known as a famous scholar-official of the late Qing dynasty. He emphasized the importance of "manners and customs" in politics, and argued that scholar-officials should establish a good relationship with each other in order to improve "manners and customs." Based on this perspective, Guo criticized the scholar-officials of the era, and appreciated the political system of the United Kingdom.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2011年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2012年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,400,000	720,000	3,120,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：中国哲学

キーワード：郭嵩燾、清末士大夫、対内・対外認識、風俗、イギリス、議会制、アソシエーション

1. 研究開始当初の背景

激動期において人はいかに自らの問題意識を持つのか、特に未曾有の秩序崩壊や、未知の他者との遭遇において人はどのような思考様式をとるのか。こうした問いへの関心

から、研究代表者は清末士大夫・郭嵩燾の風俗観念に注目した。

清末は中国史上最も激動の時期であった。太平天国の乱をはじめとする空前の規模の内乱と、西洋列強の中国進出は、中国知識人

に秩序崩壊の危機感を募らせた。郭は行政を担う士大夫官僚として、こうした秩序の崩壊に立ち向かわなければならなかったのである。さらに郭は、同じく激動期にあった1870年代イギリスに駐英公使として赴任した経験を持つ。郭はイギリスにおいて、同様に秩序構築を目指すイギリスの為政者を目にする中で、自己の認識を深めていった。以上のように郭ほどに激動期に生き、秩序の回復を目指した人物は珍しく、恰好の研究テーマとなる。

このような郭が終始一貫して「風俗」という観念を重視していたことは注目すべきである。風俗とは、人々の心や行動から生じた場の雰囲気、習慣であるとともに、最終的に人の在り方を規定する大きな力となる。郭にとって内政であれ外交であれ、この風俗をいかにコントロールできるかが重要だと認識されていたのである。

こうした発想は、われわれ現代人のものとは大きく異なっている。これを単に伝統的、前近代的発想と片づけるのではなく、郭の論理に即して具体的に明らかにすることで、われわれにとっても有益な思想的資源となると考えた。

2. 研究の目的

本研究の目的は次の3点にある。

(1) 郭嵩燾の経験を通して、当時の士大夫たちが直面した国内外における秩序崩壊の実態を描き出すことである。清末最大の事件は、太平天国の乱と西洋列強の進出であり、郭はそのいずれにも関わった。

前者においては、曾國藩の湘軍の下で軍費徴収官として戦時における軍費獲得という極めて困難な業務を担った。太平天国軍と戦うのみならず、徴税に反対する士大夫や一般庶民をも説得しなければならなかった。

また後者においては、郭は地方大官として西洋諸国と条約交渉に臨まなければならなかった。西洋人という未知の他者と交渉を行わなければならなかったうえ、条約や西洋人を排斥しようとする現地中国人の批判を鎮静化させなければならなかった。

このような極度の秩序崩壊の状況を明らかにすることは、本研究の前提作業に不可欠であると同時に、中国社会の構造を理解するうえでも有益であろう。

郭はこうした未曾有の秩序崩壊に対して、人々を秩序だった方向へも、逆に無秩序へも向かわせる力として風俗に注目し、そのコントロールの仕方を模索していった。こうした現代人とは異なる発想の内実を克明に描くことが本研究課題の大きな目的の一つである。

(2) 郭嵩燾思想における西洋の位置づけを正確に見出すことである。郭嵩燾は初代駐英公使を務め、早い時期から一貫して西洋文明に関心を示してきたこともあり、先行研究では、彼がいかに進歩的人物であるかということや、あるいは儒家思想家がなぜ西洋を評価できたのかという点が論じられてきた。

これに対して本研究課題が重視するのは、そもそも郭の思想において西洋とはどのような位置づけられており、また具体的にどのような西洋イメージが抱かれていたのかということである。

前述の通り、郭にとっての主要な課題は秩序崩壊を食い止めることであり、風俗をコントロールすることであった。郭にとって西洋は、こうした問題意識に沿う形で、その方法の一つとして解釈されていくのである。

さらに本研究課題は、郭が西洋の政治制度を評価しえたことに注目するのではなく、彼が西洋の政治制度のどの部分にひかれたのか、またなぜひかれたのかを、前述の彼の問題意識と関連させながら具体的に明らかにする。郭がとりわけ注目したのは、イギリスを中心に発達した議会制と各種アソシエーションであった。なぜ郭はこれらにとりわけ関心を示したのだろうか。この問題を中心に考察を進める。

(3) 郭が見出した風俗とその改良の論理を具体的に明らかにすることである。

前述の通り、郭は空前の秩序崩壊に際して、風俗改良を目指した。上記(1)(2)では、郭の実生活に即した形で郭の問題意識を分析するが、郭の残した全史料を俯瞰した時、彼がその問題をより抽象的レベルでも模索していたことが予測される。このような模索を彼の哲学著作から明らかにする。

3. 研究の方法

(1) 史料・関連文献の収集

郭嵩燾は、前述の通り、当時国内外の多くの重大な事件や人物と関係を持ち、自身も積極的に社会活動を行った人物である。そのため、彼の思想を総体的に明らかにするには、まず多方面の史料や関連文献を集めることが重要であった。収集した史料や文献は下記の通りである。

① 郭嵩燾関係資料

郭自身が残した史料のほか、郭と関係の深かった事件や人物の史料、およびそれらに関する先行研究文献を収集した。

② 清代政治外交思想史関係資料

郭の思想と行動を大きな歴史の流れに位置づけるため、はば広く清末や清代の政治外

交思想史に関する史料・研究文献を収集した。

③公刊された湖南図書館蔵資料等

郭の故郷である湖南省には、郭関係の史料が多く保存されており、その史料は近年順次公刊されるようになってきている。『湖南図書館蔵近現代名人手札』などを収集した。

④イギリス近代史関係研究文献

本研究課題は、イギリス近代史の知識が必要とされるものである。そのため、郭が渡欧した時期の英文史料や、イギリス近代史に関する通史的研究文献、そして議会史やアソシエーション史に関する特殊テーマ研究文献などを収集した。

(2) 方法論の確立

①上記資料の読解

まず(1)で述べた各種資料の読解を進めた。その過程で、郭が1850年代に軍費徴収官を担う中で、士大夫同士の関係が風俗の良し悪しに関わることを見出した点や、1860年代に署広東巡撫を担当する中で、通商条約を中国人民の風俗安定に用いるという興味深い思考を確認できた。さらには、郭の1870年代渡欧時期の思想をイギリス史研究文献とつきあわせながら考察し、彼の議会制観やアソシエーション観が他の士大夫には見られない独特な性質を持っていたことを明らかにした。

②経学・諸子学関係著作の収集と読解

研究を進める中で、上記(1)で述べた資料以外に、郭嵩燾の残した著作として経学・諸子学関係のものが高い重要性を有していることが痛感され、この方面の史料・文献の収集と読解に相応な時間と労力をかけた。経書や諸子の書の解釈学である経学・諸子学という観点から研究するには、郭や同時代人の著作を読むだけでなく、広く古代中国から綿々と続いてきた解釈史を踏まえなければならない。郭嵩燾の残した経学・諸子学関連著作で、前述の風俗観念を考えるうえでとりわけ重要なのが、『礼記質疑』、『大学章句質疑』、『中庸章句質疑』、『荘子』注であり、これらの歴史的な位置づけを探るため、鄭玄や郭象、朱熹、王陽明といった歴代の著名思想家の著作の収集や読解を行った。

③中国古代思想関係の学会への参加

近代思想史を専攻する研究代表者にとって、古代思想を学習するためには、書籍からの学習だけでなく、専門家との交流も欠かせないと思われた。そこで、中国古代思想関連の学会等に積極的に参加し、知見を深めるよう努めた。

(3) 研究成果の公表

得られた知見は極力公表し、客観的な批判を仰ぐことを心掛けた。一つは、中国思想や中国史を研究する国内外の専門家からの評

価を得るために、論文公表や学会発表を積極的に行った。またもう一つは、他分野研究者や学術に関心を有する一般市民の方々に対して、研究成果を分かりやすく説明した論文等も執筆した。

4. 研究成果

(1) 研究内容における具体的な成果

前述の研究目的の3点につき、下記の通りの研究成果を得た。

①郭が直面した秩序崩壊の実態と風俗観念の展開

郭嵩燾は1850年代、湘軍の下で軍費徴収官として軍費獲得を担い、太平天国軍と戦うのみならず、徴税に反対する士大夫や一般庶民をも説得しなければならなかった。また郭は、1860年代に署広東巡撫として西洋諸国と条約交渉に臨んだが、西洋人と交渉を行わなければならなかったうえ、西洋人を排斥しようとする現地中国人にも対処しなければならなかった。

このような秩序の混乱の中で郭が痛感したのは、徴税や外交において常に互いをけなしあい総意を形成できない士大夫たちのありさまであった。現実的状况として軍費の捻出が必要であるにもかかわらず、一部の士大夫は郭の徴税行為が商人を痛めつけるものだと批判し、裏では商人と癒着していた。また外交において士大夫たちは、無謀な排外論を唱えて民衆をあおったかと思えば、西洋の脅威を実感すると妥協論に終始した。以上のように、士大夫が明確な総意の下で一丸となって国政にあたることのできないことこそ、風俗の乱れにつながると考えられたのである。

以上のような経験と思索から、郭の政治思想においては、風俗を良い方向に向かわせるために、士大夫同士が良好な関係を築き、総意を形成できるようになることが目指されていくのである。

②郭嵩燾思想における西洋の位置づけ

郭の課題は秩序崩壊を食い止めることであり、風俗をコントロールすることであった。そのためには、士大夫同士の関係性、総意形成能力が重視された。本研究課題により、郭にとって西洋とは、こうした問題意識に沿う形で解釈されていったものであったことが判明した。

郭は前述のような士大夫同士の関係性の重視から、イギリスの議会制およびアソシエーションに着目した。なぜなら郭にとってこれらの制度や組織は、なにより、民の上に立つ為政者たちが、互いに良好な関係を構築する場であると考えられたからである。われわれ現代人の見るところ、議会制とは一般に、

国民の代表たる議員が立法・政策立案を行う機関であり、民意を政治に反映させるためのものである。またアソシエーションも 19 世紀には労働者層にまで浸透した文化であった。こうした現代人の見方と郭のそれは大きく異なっている。なぜなら、郭の目には、議員やアソシエーションの主導者は、一般民衆とは区別された為政者であると映っていたからである。こうした郭の見方は、現代人の認識とは異なる別の議会観・アソシエーション観を提示しており大変興味深い。

さらに、イギリス史研究をひもといてみると、19 世紀においても隠然たる政治勢力を保持したのはジェントルマン階層であり、またアソシエーションにおいてもジェントルマン層と労働者層の志向の交差の時期にあっていたことが示されており、郭の認識は、これまで中国近代思想史研究者が注目してこなかったイギリス史の一側面を的確に捉えていたのではないだろうか。

③郭の経学・諸子学著作に見る風俗とその改良の論理

郭は終始、風俗改良を目指し、そのために士大夫同士の良い関係の構築や総意の形成を模索した。本研究課題では、郭のこのような模索が、彼の経学・諸子学著作、とりわけ『大学章句質疑』、『中庸章句質疑』、『莊子』注に見られることを明らかにした。

まず『大学章句質疑』、『中庸章句質疑』であるが、郭はこれらの著作において、修己と治人、内と外といった観点から士大夫個人の在り方を考察している。郭はこの二書の中で、士大夫の自己修養がいかに目に見える形で外部に影響を与えるかということ、それと同時にいかに外部から影響を受けやすいかということ、歴代の朱熹などの思想家以上に強調する。

また、郭は『莊子』注において、士大夫同士の関係の在り方を論じている。郭が『莊子』に読み込んだ問いとは、あらゆる存在がそれぞれに是非を有して論争する世界において、いかにして他者と向き合うべきかという問題であり、『莊子』の解釈家として有名な郭象とは全く異なる見解をとっている。以上の通り、郭は士大夫同士の良好な関係構築という目標を達成するため、経学・諸子学著作においても同様の問題意識を展開していたのである。

(2) 研究成果の公表と国内外での位置づけ・インパクト

①国内外での成果公表

得られた知見は極力公表し、客観的な批判を仰ぐことを心掛けた。その結果、日本人研究者および中国語圏研究者の双方から、本研究課題についての有益な批評を得ることができた。特に、郭の問題意識とイギリスの議

会制・アソシエーションの関係については全国学会で発表を行った。また郭の経学・諸子学著作の位置づけについては、国際・国内学会でそれぞれ 1 回ずつ発表を行い、1 本の研究論文を公表した。郭の議会観については多くの先行研究が存在するものの、本研究課題のように、郭の議会観が風俗の改良とそのため士大夫同士の関係構築の機関と解釈されていたことを示したものは、管見の限り存在しない。また郭のアソシエーション観を重点的に分析した点も本研究課題の新しさと言える。さらに郭の経学・諸子学については近年研究が進んできた分野であるが、郭の生涯を通じた風俗改良という問題意識と関連付けて論じた研究はあまり見られない。

以上の成果は、今後、中国知識人の秩序観や激動期における問題意識という大きな問いを考えていく際の重要な一事例とすることができよう。

②他分野研究者や一般市民への成果の還元

得られた知見は、同分野の専門研究者のみならず、他分野研究者や学術に関心を有する多くの一般市民の方々に公表することを心掛けた。

郭の議会観は、現在もあるべき議会制を模索するわれわれ日本人にとっても重要な思考材料となる。研究代表者はこの点を意識しつつ、一般読者向け総合学術雑誌に、郭の議会論の意義を取り上げた論文を公表した。

また、2012 年度に特に重視したのは、本研究課題を単なる個別研究に終わらせるのではなく、より広く中国近代史の通史の構築に役立てるということであった。研究者にとって通史を構築するという作業は、自己の研究成果を高めるための方法であるとともに、中国に関心を有する多くの人々のためにも役立つものである。研究代表者はこのような観点から、通史構築に関係する研究会に参加し、本研究課題を踏まえた知見を報告するとともに、書評論文の形で自らの見解を提示した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 3 件)

- ① 小野泰教・北村祐子・河野正、[書評]『新図説中国近現代史——日中新時代の見取図』、近代中国研究彙報、査読有、35 号、2013、211-231 (小野の執筆は 213-219)
- ② 小野泰教、郭嵩燾の政治思想——誠意・慎独・絜矩を中心に——、孫文研究、査読有、51 号、2012、1-10
- ③ 小野泰教、清末士大夫の見た西洋議会制——いかにして理想の君民関係を築くか、アジア遊学 東アジアの王権と宗教、査読無、

〔学会発表〕（計4件）

- ①小野泰教、郭嵩燾の風俗観念と西洋政治制度——議会制、学会組織を中心に——、日本現代中国学会・第62回全国学術大会、2012年10月21日、一橋大学国立キャンパス
- ②小野泰教、書評報告：田中仁ほか『新・図説 中国近現代史—日中新時代の見取図—』序章・第1編、中国現代史研究会・書評会、2012年7月20日、明治大学駿河台校舎
- ③小野泰教、郭嵩燾『中庸章句質疑』の清末思想史上における位置、孫文研究会・冬季研究例会、2012年1月9日、兵庫県神戸市・中華会館
- ④小野泰教、致知与誠意之間的关系：以郭嵩燾『大学章句質疑』為例、儒道仏三家的哲学論辯国際学術研討会、2011年11月12日、台湾・台北・台湾大学哲学系

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小野 泰教 (ONO YASUNORI)
東京大学・人文社会系研究科・助教
研究者番号：50610953